或本、藤原京より寧楽宮に遷る時の歌

七九番

大君の　命かしこみ　にきびにし　家を置き　こ
もりくの　泊瀬の川に　舟浮けて　我が行く川の
川隈の　八十隈おちず　万たび　かへり見しつ
つ　玉桙の　道行き暮らし　あをによし　奈良の
京の　佐保川に　い行き至りて　我が寝たる
衣の上ゆ　朝月夜　さやかに見れば　たへのほに
夜の霜降り　石床と　川の氷凝り　寒き夜を　息
むことなく　通ひつつ　作れる宮に　千代までに
いませ大君よ　我も通はむ

反歌

八〇番

あをによし　奈良の宮には　万代に　我も通はむ
忘ると思ふな